

生徒理解を深める心理・適応6尺度の構成

The Construction of Psychological and Adaptive Scales to Deepen Understanding Students

(2017年3月31日受理)

清重 友輝* 西本 素江** 福森 護

Yuki Kiyoshige Motoe Nishimoto Mamoru Fukumori

Key words : 教育問題, 生徒理解, 心理傾向, 適応, ストレス

抄 録

教育現場で教師は様々な問題と向き合っている。教育問題の解決には生徒理解が不可欠であるが、色々な事情からそれがうまくいかないことも多い。そうした状況を改善するために、本研究では生徒理解を補助することを目的とした「生徒理解を深める心理・適応6尺度」を構成した。127名の中学生を対象に、各尺度15項目をランダムに並べた質問紙を用い、4件法で回答を求めた。6尺度ごとに項目を集め、主因子法で因子分析し、第1因子に負荷の高い順に10項目を選んで尺度とし、再び主因子法で因子分析を行った。6尺度の内容は、生徒のおおまかな心理傾向を測るものとして①「内的自己確立」・④「他者・社会定位」、生徒の適応状況を測るものとして③「家庭適応」・⑤「クラス・仲間適応」・⑥「学校・教師適応」、生徒の心理的な負荷を測るものとして②「ストレス」の各尺度である。

I. 問題と目的

1. 問題の所在

教育現場には、常に課題が山積しており、教師は様々な問題と向き合っている。その中には、解決困難なものもあり、悩みを抱えている教師は多い。

教育問題と言われるものには、いじめ、不登校、非行、校内暴力、学級崩壊、学業不振、学力低下といったものがあり、いずれも早急に解消しなければならないものである。

こうした問題が発生する背景には、教師と生徒との関係性や、生徒同士の関係性、家庭環境といった要因が複雑に絡んでおり、原因を特定し、これを取り除くことは容易なことではない。

ただし、いずれの問題に関しても、トラブルが発生し、またその解決がうまくいかないとき、その大きな要因として考えられるものがある。それが、生徒理解の欠如で

ある。

教師による生徒への理解が十分でないと、問題行動の予兆を見逃してしまったり、問題が顕在化した後の対応を誤ってしまったりする。また、そうした対応のまずさが、さらなる問題の深刻化につながり、解決困難な段階にまで進んでしまうこともある。

生徒を理解することは、ただ彼らの学業成績を把握することではない。教科ごとの得意不得意を知り、どの程度の学力レベルに達しているかを知ること、教育を行う上で必要なことではある。

だが、それだけで生徒を十分に理解できたとするのは無理があるし、実際にそれで教育問題が解消するわけでもない。

学校教育に求められるのは、単に知識や技術を教えることだけではない。一人の人間として、人格の完成を目指して心身ともに成長することが最大の目的である。

知識や技術の習得とは、そのための手段であって目的

*ひびきのさと人間精神学研究所 **徳島市城西中学校

そのものではない。当然、教師から生徒への働きかけも、技術的なことだけでなく、精神的な面にも及ぶことになる。

そして、成長の過程とは平坦なものではなく、いくつもの山や谷があるのが普通である。特に、精神的な面では、発達途上にある段階では不安定で、不規則なものになりがちである。

生徒を理解するという事は、そうした不安定な部分も含めて、彼らの内面への理解を深め、生徒それぞれがもつ固有の性質や特徴、傾向といったものを把握することである。端的に言えば、生徒の心の在り方を知ることである。

このような、生徒の心への理解を深めるためには、教師と生徒との間での密接なコミュニケーションが欠かせない。しかし、現状ではいくつかの要因から、それが困難になりつつある。

たとえば30年前と比べても、教師に対する管理は厳しくなり、より多くの雑務に追われるようになってきている。その結果、生徒とじっくり話し合うような時間がとれず、コミュニケーションの機会自体が減ってしまっている。

また、多忙のあまり、教師自身からも精神的な余裕がなくなり、生徒に対する管理を強めたり、逆に放任したりするといったことも起こっている。

当然、こうした状況が教師と生徒の関係により影響を与えることはない。相互理解の機会は失われ、関係性は希薄になり、信頼関係も芽生えなくなってしまう。

この状態が続くことは、教師にとっても生徒にとっても望ましいことではない。これを改善するには、教師の勤務内容の見直しなど、抜本的なシステムの変革も必要になってくる。

とはいえ、それは教師個人の力でできることではないし、またすぐに実現できるようなものでもない。そして、システム面の改善が必要だからといって、それをただ待つというわけにもいかない。現実には、教師の前には生徒がおり、生徒は教師の援助を必要としているからである。

生徒とのコミュニケーションの機会が減少しているとしても、それを生徒理解が欠如していることの免罪符とすることはできない。限られた条件の中で、最善の道を探さなければならない。それが、教師自身の仕事を円滑に進めることにもつながる。

それでは、具体的にはどういった対策をとるべきであるのか。決して多いとはいえ時間の中で、生徒への理解を深めるには、個々の教師の観察眼に頼るだけでなく、生徒の心を映し出し、それを浮き彫りにするようなものが必要になる。

生徒の心が、現在どういった状態にあり、どのような傾向を示しているのか。注意すべきなのはどこで、どういった部分に問題を抱えているのか。これらを明らかにすることができれば、生徒に対する理解を格段に増すことができる。そして、これを可能とすることを目指して構成するのが、「生徒理解を深める心理・適応6尺度」である。

2. 目指す検査の概要

(1) 検査の目的

検査の目的は、生徒への理解を深め、教育活動を補助することにある。

そして、現場の教師にとって、必要性が高く、かつ緊急性が高いのは、やはり生徒に何らかのトラブルが生じている場合、それをいかに早い段階で掴むかということである。

生徒に人間的な成長を促すことが教育の目的であるが、それも生徒が良好な状態を保ってこそ、遂行することができる。

何かしらの問題を抱えており、落ち着きを無くした状態の生徒に対し、通常どおりの教育活動を行うことは難しい。まずは、生徒に何が起きているのかを把握し、問題の解消や沈静化を試みるのが先決である。

そのためには、それぞれの生徒がもつ特有の性質や特徴、そして抱えている問題を浮き彫りにすることが必要となる。

それでは、何を基点にすれば、それらを見つけることができるのか。

尺度構成の重要なポイントとして、3つの要素を挙げることができる。一つは、生徒のおおまかな心理傾向。二つに、適応。三つめが、ストレスである。

こうした考えに基づき、生徒のおおまかな心理傾向に関連するものとして、第Ⅰ尺度「内的自己確立」と第Ⅳ尺度「他者・社会定位」を構成する。適応に関連するものとして、第Ⅲ尺度「家庭適応」、第Ⅴ尺度「クラス・

仲間適応」, 第VI尺度「学校・教師適応」を構成し, ストレスに関連するものとして, 第II尺度「ストレス」を構成する。

(2) 構成を目指す尺度の解説

1) おおまかな心理傾向

構成を目指す6尺度について, 3つの要素ごとに解説を行う。

まず, 生徒のおおまかな心理傾向であるが, これはその生徒の心が, 概ねどういった方向に向けられているかを捉えることを目的としている。

教師が生徒に対して抱くイメージは, 明るい, やさしい, 大人しい, 物静か, 活発, 暗い, 怒りっぽい, わがまま, 自分勝手といったような, 特徴を漠然と捉えたものであることが多い。これらも一種の心理傾向といえるが, 内容が曖昧にすぎるために, 現実的な問題対応には役立つことがほとんどである。

怒りっぽい, 自分勝手といったネガティブなイメージを抱いたとして, それが生徒のどういった心理状態から生まれているのか。これを明らかにしなければ, 問題への対応には結びつかない。

ただ特徴を漠然と捉えただけでは, 生徒の内面を捉えたことにはならない。大人しいと思っていた生徒が, 急に暴れ出すといったことがあるように, 表面的な特徴と内的な性質は必ずしも一致しないからである。

誤解や偏見を避けるには, 生徒の内面を評価するための客観的な基準を設ける必要がある。この基準として, 生徒の心理を捉える上で有効と考えられるのが, 中塚(1994)の唱える自己・他己双対理論に基づく「内的自己確立」と「他者・社会定位」という二つの傾向を軸にした評価基準である。

「内的自己確立」とは, 自分というものを尊重し, 自己主張や自己追求を図ることで, 独立した一人の存在としての「自己」を確立していこうとする心の方向性を表している。その性質を簡潔に示すなら, 自分へと向けられた心, あるいは自分に閉じた心ということができる。

これに対し, 「他者・社会定位」とは, 他者との関係性を尊重し, 他者を求め, 社会的なつながりを欲する心の方向性を表している。その性質を簡潔に示すなら, 他者へと向けられた心, あるいは他者に開かれた心という

ことができる。

重要なのは, この二つの傾向は相反する性質をもつという点と, そうでありながらも個々別々に動くのではなく, 連動して作用するという点である。

自分というものを確立しようとする心と, 他者とのつながりを求めようとする心とは, 同じ方向性をもつものではない。両者は明確に対立的な関係にある。ただし, そうした関係にありながらも, 両者はそれぞれがバラバラに作用するのではなく, 互いに影響を与え合いながら連動して働いている。この結果, 何が起こるかといえば, この2つの傾向の間には, 一方の力が強まれば, もう一方の力は弱まるという関係が生じることになる。

内的自己確立の傾向が強まり, 自己主張や自己追求をしようとする方向に心が向かえば, その分だけ他者を求め, 他者とのつながりを尊重しようとする傾向は弱まることになる。

逆に, 他者・社会定位の傾向が強まり, 他者を尊重し, 社会的なつながりを求めようとする方向に心が向かえば, その分だけ自分を主張し, 追求していこうとする傾向は弱まることになる。

両者の関係はシーソーのような状態にあり, 常に揺れ動いている。この動きを捉えることが, 生徒の心理状態を理解する上で大きな意味をもつことになる。

自己追求的な傾向が強いのか。それとも他者との関係性を重視する傾向が強いのか。両者の力関係がどういった状態にあるかが, その人のおおまかな心理傾向を形成する。そして, それが人柄や性格といったものの基礎となり, あらゆる行動に反映されることになる。

この2つの傾向を軸にして, 生徒の内面を評価することで, より具体的な判断を行うことができる。たとえば, 表面的には大人しく物静かに見える生徒も, その心理傾向が内的自己確立の側によっているか, それとも他者・社会定位の側によっているかで, 実態は大きく異なってくる。前者であれば, 本当は自分をもっと主張していきたいのに, それをうまく表に出せていないというネガティブな部分が見えてくるし, 後者であれば, 他者との関係性を尊重することを望んでおり, それが控えめな自己主張につながっているというポジティブな見方をする

ことができる。

一つ注意しなければならないのは, 内的自己確立と他

者・社会定位は、どちらかだけがあればよいといったものではなく、両者ともに欠かすことができないという点である。

人が生きていく上では、自分というものを追求し、確立していくことも重要であるし、他者との関係性を尊重し、社会に定位していくことも重要である。どちらが欠けても、問題が生じることになる。したがって、両者をバランスよく保持することが大事になってくるし、それが心理的な安定にもつながることになる。

だが、内的自己確立と他者・社会定位とは、相反する関係にあり、どちらかの傾向が強まれば、もう一方の側は弱まってしまう。内面の傾向に偏りが生じること自体は、誰にでも起こりえることであるが、偏りが大きくなりすぎると多くの問題が生じることになる。

内的自己確立の側に大きく偏りを見せた場合、他者との関係性を尊重しようとする傾向がかなり弱体化することになる。この結果、自分を主張しようとする面だけが肥大化し、エゴイスティックな部分が前面に現れることになる。他者への思いやりや配慮に欠け、身勝手な行動が目立ち、攻撃的な言動が増加するようになる。何事も自分本位の捉え方をして、他者の言うことに耳を貸さなくなる。他者に対する配慮を欠いた自己主張や自己追求は、自分を確立する手段というよりも、ただ自己中心的なふるまいでしかなくなってしまう。

これとは逆に、他者・社会定位の側に大きく偏った場合は、自分というものを尊重し、追求していこうとする傾向が弱体化することになる。この結果、主体性や積極性といったものが失われ、自分から進んで行動することがなくなってしまう。自分の意見や主張を表に出せず、他者の言うことにそのまま従うといったことが起こる。選択や決断を迫られる場面でも、他者の動向に大きく左右され、状況に流されることが多くなる。自分をうまく確立できていない状態での他者への定位は、過剰な依存となることもあるので注意が必要となる。

内的自己確立と他者・社会定位は、どちらも必要なものであるが、一方の側に偏りすぎれば、マイナス面が強くなってしまふ。重要なのは、両者がバランスのよい状態にあることで、これを維持できているとき、生徒の心は最も安定した状態にあるといえる。

2) 適応

次に「適応」について。生徒に限らず、人が生活していく上では多くの人と関係をもつことになる。家庭の中では家族との関係性があり、学校や職場では級友や同僚、上司らとの関係性があり、親しい間柄にある人とは、友人としての関係性がある。そうした様々な他者との関係性の中で、人はうまく適応し、順応しようと努めることになる。

自分を取り巻く環境にうまく適応することができていれば、心理的にも安定した状態を保ちやすい。逆に、周囲の環境に対して不適応を起こしていると、不安定な状態に陥りやすくなる。

適応するという事は、ただ自分を周囲に合わせるだけではない。他者との関係がより親密なものとなることで、お互いに強く影響を受けあうようになる。それは、決して一方的な関係ではない。適応している対象が何であるかによって、自分自身の心理的な傾向や状態にも変化が出てくる。

何かに対してよく適応するという事は、そこに自分の軸足をおくということでもある。相手を受け入れ、自分も相手から受け入れられることで、安心感や充実感を得ることができる。そのことが、心理的に安定した状態を保つことにもつながる。その人が何に対して適応しているかを知ることは、その人が何によって自分を支えているかを知ることに他ならない。

また、心理的に不安定な状態にあるような場合には、何に対して不適応を起こしているかを確認することで、動揺の原因を推測することもできる。

これらの点から見て、生徒への理解を進めていく上で適応の状況を把握することは重要になると考えられる。

それでは具体的には何を対象として適応状況を見るべきであるのか。学校教育という場に限定すれば、生徒が適応する対象も自然と限られたものとなる。特に重要なものを選別するなら、「家庭適応」、「クラス・仲間適応」、「学校・教師適応」の3つに絞ることができる。検査では、この3つを適応に関する尺度として取り上げる。

「家庭適応」は、生徒が家庭の中でうまく適応できているかを測るもので、家族との関係性がどういった状態にあるかを把握することが目的となる。

家族は、他者との関係の中でも、最も基本的で、最も

距離の近いものである。多くの場合、それは自分を支える上で重要な基点となり、活動の基盤となっている。

また、関係性が緊密であるだけに、互いに影響を与え合うことが多く、家族とのつながりは性格や人柄の形成にも大きな役割を果たしている。生徒理解を深める上で、生徒と家族との関係性がどういった状態にあるかを把握しておくことは非常に重要といえる。

家庭に対してうまく適応できていないような場合、どうしても心理的に不安定な状態になりやすい。特に、まだ精神的な自立が十分でなく、家庭への依存度が大きい段階ではその傾向が強くなる。

これとは逆に、家庭に対してうまく適応できていても、よく問題行動を起こすというケースもある。これは、家庭（主に両親）の側に何らかの問題がある場合に起こる。

家庭によく適応しているということは、それだけ家族との結びつきが強く、影響を受けやすくなるということでもある。親だからといって、必ずしも精神的に成熟しているとは限らない。人柄や性格に大きな偏りが見られることもある。そうした場合、家族間の結びつきが強ければ、子どもは親の影響を強く受けることで、子ども自身の性格形成に問題が生じることになる。家庭適応がよいからといって、それが常によい方向に働くとは限らないので、この点は注意しておかなければならない。

次に「クラス・仲間適応」について。学校では、いくつかのクラスに分かれて、その中で級友とともに長い時間を過ごすことになる。また、クラブ活動などではクラス以外の仲間と行動をとともにして、関係を深めていくことになる。

クラスやクラブの中に、親しい友人がおり、良好な関係を保つことができているならば、クラスや仲間によく適応しているといえることができる。互いに信頼しあい、心を許すことができる友人を得ることは、大きな喜びであるし、心強くもある。クラスの中にそうした友人がたくさんいれば、居心地の良さを感じ、安心感を得ることができる。それは、心理的な安定を保つ上で大きな力になる。

逆に、親しい友人がいなかったり、交友関係にトラブルを抱えているような状態では、疎外感や孤独感を強く感じ、心理的に不安定な状態になりやすい。

中学校くらいになると、生徒の心理傾向にも変化が見られ、自分というものを主張し、確立していこうとする

傾向が強くなっていく（例外もあるが）。第二次反抗期とも言われるこの時期は、精神的な自立が進む時期でもある。子どもとして扱われることを嫌がり、より対等な関係を望むようになるので、家族よりも友人との関係を優先するといったことも増えてくる。友人との関係がより大きなウェートを占めるようになるわけで、それだけに、ここで不適応が起こるとトラブルにつながりやすい。見守る側も注意しておく必要がある。

三つめに「学校・教師適応」について。生徒が学校に通う期間は長く、日々の生活の中でも学校で過ごす時間が占める割合は大きい。そのぶんだけ、学校という場に適応することができているかどうかは、生徒の心理状態に大きな影響を及ぼすことになる。

生徒が自分の学校生活に満足感を感じ、学校に行くことを肯定的に捉えていれば、その生徒は学校生活によく適応しているといえることができる。勉強やクラブ活動、学校行事を行うことにやりがいを感じ、学校で過ごす時間に自分なりの意味を見出す。そうしたことができる生徒は、心理的にも安定した状態を保つことができている。

注意しなければならないのは、学校生活を充実したものとすることは、生徒だけの力で行うようなものではなく、教師からの適切なサポートが必要になるという点である。

学校教育を受ける生徒は、まだ発達の上上にあり、自分というものが十分に定まっていない。心理的にも繊細な部分が目立ち、脆さや危うさも持っている。そうした生徒を支え、補助するのは教師の役目となる。

いざというときに頼るべき相手がいることは、大きな安心感をもたらすものである。自分を理解してくれていると感じられる人は信頼することができるし、そうした相手には気軽に相談したり、悩みを打ち明けることもできる。生徒が安定した心理状態を保つ上では、そうしたサポートを得ることが重要になる。

生徒にとって教師がよき理解者であるのなら、学校生活を送る上で大きな支えを得ることになる。それによって、より円滑に学校生活を送ることができるし、満足度の高い活動を行うことができるようになる。生徒が学校生活に適応する上で、教師のサポートは重要であり、教師と生徒の関係性がどういったものであるかが、学校適応の鍵を握るといえることができる。

3) ストレス

最後に「ストレス」について。ストレスとは、警告反応と訳される医学、生物学用語であるが、一般的には、精神的・肉体的に負担となる刺激や状況のことをいう。

ストレスの原因はストレッサーと呼ばれ、刺激の種類から物理的（寒暑、騒音など）、生物的（炎症、感染、過労など）、化学的（薬物など）、心理的（精神的苦痛）の4つに分類されることが多い。この中で、生徒の問題行動と直接的に関わるのは心理的ストレスであり、本研究でのストレス尺度もこれを測るものとなる。

心理的なストレスが高い状態になると、苛立ちや焦燥感にかられ、攻撃的な振る舞いが増えたり、逆に気分が沈み込み、何もする気が起きなくなったりする。強い疲労感や倦怠感をおぼえ、頭痛や吐き気など体調を崩すこともある。当然、こうした状態が続けばより大きな問題に発展する可能性が高くなる。

ストレスの高低を測ることは、トラブルの有無を判断する上で有益となる。ストレスが高い生徒は、何かしらのトラブルを抱えていることが予想されるし、ストレスが低い生徒には、現状では大きな問題がないと見ることができる。

心理的なストレスの高さは、行動に反映されることが多いので把握しやすい面があるが、それでも行動観察だけで全てを察知するのは難しい。内に大きなストレスを抱えていても、それを表に出さず辛抱するような生徒もいる。そうした場合、よほど注意深く見ていないと、見落としてしまう可能性がある。こうした事態を避ける上でも、検査で生徒のストレスを測ることは重要になる。

以上に見たように、おおまかな心理傾向、適応、ストレスという3つの要素を軸に、生徒の内面に対する理解を深めるための6尺度を構成する。この3つの要素を適切に測ることで、生徒が抱える問題や注意すべき点について、かなりの程度明らかにすることができると思う。

II. 方 法

1. 調査対象

尺度構成の対象とした生徒は、四国のA県の公立中学校二年生127名（男子70名、女子57名）である。

2. 質問紙の作成と実施

目指す検査の概要に従い、生徒の心理傾向を測るための基礎項目を作り、そこに現職教員の視点を取り入れることで生徒や学校の実態に即した内容とし、また中学生にも理解しやすい表現になるよう留意して、「生徒理解を深める心理・適応6尺度」の質問項目を作成した。

質問項目は、各尺度15項目ずつの合計90とし、これをランダムに並べて質問紙とした。

回答方法は、「はい」と「いいえ」に二分し、前者は「大体あてはまる」、「少しあてはまる」とし、後者は「あまりあてはまらない」、「ほとんどあてはまらない」の4件法で求めた。

この質問紙を上記調査対象に、2015年7月に、集団で実施した。

3. 分析方法

90の質問項目について、「ほとんどあてはまらない」には1点を与え、順次1点ずつ上げて数値化することで（したがって、「大体あてはまる」には4点を与えることになる）、それぞれ得点化する。逆転項目は、それに配慮して集計した。

6尺度ごとに項目を集め、主因子法で因子分析し、第1因子に負荷の高い順に10項目を選んで尺度とし、再び主因子法で因子分析する。なお、共通性の測定値は、いずれもSMCを用いる。次いで、その尺度の信頼性を示す α 係数を求める。

III. 結 果

結果は表1に示す通りである。選択された10項目を因子分析した結果の第1因子負荷と、全ての因子の固有値、および α 係数を示した。

IV. 考 察

1. データの解釈に関する検討

今回の結果から、構成した「生徒理解を深める心理・適応6尺度」が、いずれの尺度においても測定内容が明確であり、高い信頼性をもつことが示された。

これを踏まえて、ここでは構成した6尺度から得られ

表1 「生徒理解」の尺度構成結果

第Ⅰ尺度「内的自己確立」						
No.	項 目					F 1
1	状況や他人の意見にあまり流されないほうである。					.556
2	自分なりの考えや意見を持っている。					.361
3	自分の個性や能力を伸ばすように努めている。					.600
4	周りの人に左右されない心の強さをもっている。					.448
5	自分に自信を持っている。					.528
6	人と対立したとき、自分の意見を尊重するほうである。					.474
7	自分が正しいと思うことは、どこまでも主張するほうである。					.542
8	間違いに気づいても、意見を変えられない。					.509
9	自分には何かやるべき目標がある。					.632
10	自分がよいと思うことは反対されてもやり通す。					.486
寄与	2.693	1.188	0.425	0.188	0.057	$\alpha = 0.787$
第Ⅱ尺度「ストレス」						
No.	項 目					F 1
1	よくイライラする。					.614
2	腹が立つことが多い。					.651
3	吐き気をもようし、ムカムカすることがある。					.469
4	わけもなく悲しくなることがある。					.542
5	よく「疲れた」と感じる。					.510
6	世の中がなんとなく怖（こわ）い。					.514
7	常々、楽しみより苦しみの方が多いと感じている。					.703
8	頭が痛くなることがある。					.505
9	なにもかも嫌だと思う。					.758
10	気持ちが沈んでいる。					.741
寄与	3.712	0.855	0.300	0.134	0.074	$\alpha = 0.845$

たデータをどう解釈するかという点について検討を行う。

まず、「内的自己確立」と「他者・社会定位」という2つの傾向を基準として生徒の内面を評価する場合、いくつかのパターンに分けることができる。

最もよいのは、①内的自己確立と他者・社会定位がともに高いレベルにあり、両者のバランスがよいケースである。最も多く見られるのは、②内的自己確立と他者・社会定位のどちらかの側に偏りが見られるケース。注意すべきなのは、③どちらか一方の傾向に大きな偏りが見

られ、もう一方の傾向が著しく低いようなケース。両者の傾向に見られる差が大きいほど、その生徒は不安定な状態にある可能性が高くなる。もう一つ注意すべきなのが、④内的自己確立と他者・社会定位のどちらも低いレベルにあるケース。こちらの場合は、心理的な発達が未熟で、自分というものの軸がまだ十分にできていないことを示している。このケースでは、実年齢よりもかなり幼い言動が目立ったり、自分の意見や主張がなく、かといって他者を尊重するでもなく、人の意見にわけもなく追従するといった態度がよく見られる。

第Ⅲ尺度「家庭適応」

No.	項 目						F 1
1	家での居心地は良い方だと思う。						.701
2	自分の家族は、お互いをよく理解し合い、満足している。						.756
3	家族にとって自分は大切な存在である。						.825
4	父母はあなたのことが好きだと思う。						.827
5	父母はあなたを信頼していると思う。						.776
6	あなたと一緒にいて父母は幸せだと思う。						.869
7	父母をだれよりも信頼している。						.794
8	父母と一緒にいて幸せだと感じる。						.825
9	父母が好きである。						.779
10	父母に何でも話せる。						.644
寄与	6.117	0.727	0.245	0.166	0.025	$\alpha=0.937$	

第Ⅳ尺度「他者・社会定位」

No.	項 目						F 1
1	嬉しいことがあると、つい人に話してしまう。						.655
2	一人でできないことは誰かの援助を求めたいと思う。						.475
3	悩み事があるとすぐ親しい人にうち明ける。						.574
4	分からないことやできないことは、誰か人に教えてもらう方である。						.633
5	つらい気持ちや不安なことがあると、必ず誰かに相談する。						.660
6	何かをするときは他の人と一緒にしたいと思う。						.544
7	多くの人の意見には従いたいと思う。						.539
8	自分の意見よりも人の意見を尊重するほうである。						.664
9	人の笑顔に接すると、自分も嬉しくなる。						.459
10	叱られると、いつまでも気にしてしまう。						.555
寄与	3.367	0.565	0.478	0.201		$\alpha=0.825$	

こうしたパターンによる分け方は、あくまでも生徒の内面をおおまかに捉えるためのものであって、これだけで生徒の心のすべてがわかるというわけではない。

しかし、明確な基準をもたず、ただ漠然としたイメージだけで評価することに比べれば、はるかに生徒への理解を深めることができる。それぞれの生徒がもつ固有の性質や特徴を捉える上で、内的自己確立と他者・社会定位という2つの傾向を軸にした見方は、非常に有効な評価基準になると考えられる。

次に適応に関する3つの尺度について。何かに適応するということは、自分を支えるものを選ぶということでもある。支えが多いにこしたことはないが、すべてに適

応していなければ問題というわけでもない。重要なのは、安定した状態を維持できるだけの確固たる地盤があるかという点である。たくさんの薄っぺらな関係をもつよりは、強固な結びつきを一つ得ることの方が、心理的な安定につながりやすい。

3つの尺度の数値が全て低く、何に対しても適応できていない状態は、誰に対しても心を開くことができず、大きな不安を抱えていると見ることができる。これは、かなり危険な状態といえる。

また、他者とのつながりを得ることは、よいことばかりをもたらすわけではない。他者に心を開くことは、それだけ相手からの影響を強く受けることでもある。接す

第V尺度「クラス・仲間適応」(○は逆転項目)

No.	項 目	F 1
1	学級内や学校内におしゃべりや遊びに誘ってくれる友人がいる。	.492
2	自分の本音や悩みを、話し合える友人がいる。	.787
3	友だちとのつきあいは自分の成長にとって大切であるので大事にしている。	.614
4	友だちと一緒にいると楽しい。	.700
5	友だちとはだいたい意見が合う。	.634
6	友だちは私のことならだいたい知っている。	.628
7	友だちの考えていることはだいたい分かる。	.538
8	友だちのことを大切にしている。	.714
9	クラスの誰とでも話をすることができる。	.427
⑩	友だちとの関係に不満がある。	.502
寄与	3.759 0.583 0.299 0.171 0.001 $\alpha=0.835$	

第VI尺度「学校・教師適応」(○は逆転項目)

No.	項 目	F 1
1	学校内に自分の悩みを相談できる先生がいる。	.460
2	先生方はクラブ・授業・相談などで、よく生徒を指導していると思う。	.527
3	学校の勉強に、自分から進んで取り組んでいる。	.233
4	先生は自分のことをかなりよく理解していると思う。	.665
5	学校生活に、充実感や満足感を覚え、喜びを感じている。	.796
6	この学校の先生に親しみを感じる。	.610
⑦	この学校の先生に対して不満がある。	.466
8	この学校の生徒であることを誇りに思う。	.592
⑨	学校に行きたくないと思うことがある。	.502
10	学校へ登校することが楽しみだ。	.625
寄与	3.203 1.063 0.442 0.319 $\alpha=0.798$	

る相手がよい人ばかりであればよいが、実際にはそんなことはあり得ない。悪い影響を受けることもでてくる。

したがって、適応という観点から生徒が抱える問題を理解しようとする際には、うまく適応できているかということだけを見るのではなく、適応している対象がどういった性質や傾向をもっているかについても留意する必要がある。

次に「ストレス」尺度についてであるが、注意しなければならないのは、ストレスの高低を測ることは、トラブルの有無を判断する上では有益であるが、生徒理解という点では、それだけでは不十分ということである。

ストレスが高い生徒は、何かしらの問題を抱えている

ことは容易に察することができる。重要なのは、その問題が何に起因しているかを把握することである。

ストレスが高いことがわかって、その原因がわからなければ、有効な対処をとることはできない。原因の特定まで含めて理解を進めることで、はじめてストレスの高低を測る意味が出てくる。

このとき、重要となるのが、他の尺度との関連である。特に、適応に関する尺度と組み合わせて、両者の結果を比較し検討することで、ストレスの要因をかなり限定することができる。

強い心理的ストレスとは、多くは対人関係の中で生じるものである。そして、対人関係のトラブルは適応の状

況を見ることで、ある程度予測することができる。家庭、クラス・仲間、学校・教師のどこかに不適応を示す数値があれば、その場における対人関係に問題が生じていると見ることができるし、それがストレスの原因になっていると考えることができる。また、どこにも適応していないような場合は、他者とのつながりがなく、自分が、大きなストレスになっていると見ることができる。

これに加えて、心理的なストレスの感じ方には、個人差があるという点にも留意する必要がある。同じような状況、同じような条件になったとしても、感じるストレスが皆同じになるわけではない。より強くストレスを感じる人もいれば、それほど感じない人もいる。こうした違いが出る要因はいくつかあるが、その一つに心理的に安定した状態を普段から保つことができているかということがある。

心理的に安定した状態を日頃から保つことができれば、ストレスを感じる状況におかれたとしても、ある程度耐えることができる。自分の中で不安や焦りをうまく処理することで、落ち着きを取り戻し、ストレスを軽減することができる。逆に、いつでも心理的に不安定な状態にあるような場合は、本来はそれほど気にならない些細なことに対しても、強い苛立ちを感じたり動揺したりする。何をしても不安を感じることが多く、それがストレスの高さに結びついてしまう。

ストレスが高い状態だと、心理的に不安定になるのは当然のことであるが、この2つの関係は一方的なものではない。心理的な脆さや弱さが、ストレスに対する耐性を弱めてしまうこともあるので、この点を見落としてはならない。

心理的に安定しているかどうかは、ストレスへの耐性に大きく関係する。そして、心理的な安定度を見る上で、一つの重要な指標となるのが、内的自己確立と他者・社会定位のバランスである。

両者がバランスのよい状態であれば、心理的に安定した状態を保ちやすくなり、バランスの悪い状態であれば、心理的に不安定な状態に陥りやすくなる。生徒の心理的ストレスを検討する上では、こうしたストレスに対する耐性という観点から、内的な傾向の偏り方についても考慮する必要がある。

以上に見たように、生徒の感じているストレスの高さ

と、他の尺度との関連性を検討することで、生徒の内面に関する多くの知見を得ることができる。これらは、生徒への理解を深めていく上でも、また、生徒が内に抱える問題を発見する上でも、大いに役立つと考えられる。

2. 再検査の結果と今後の課題

構成した「生徒理解を深める心理・適応6尺度」を、2016年7月に同じ調査対象に再検査を行ったところ、表2に示す結果が得られた。これにより、この検査が高い信頼性をもつことが改めて確認された。

表2 再検査信頼性結果

第Ⅰ尺度 「内的自己確立」	第Ⅱ尺度 「ストレス」	第Ⅲ尺度 「家庭適応」
0.689	0.760	0.753
第Ⅳ尺度 「他者・社会定位」	第Ⅴ尺度 「クラス・仲間適応」	第Ⅵ尺度 「学校・教師適応」
0.719	0.672	0.747

今後は、内田クレペリン検査や学力テストとの関連性や、生徒指導上問題のある生徒の結果について調査を行い、検査の妥当性について検討を行う必要があると考える。

参 考 文 献

- 中塚善次郎 (1994) 人間精神学序説 — 自他統合の哲学的心理学の構築とその応用 —. 風間書房.